

浙江西部・福建北東部歴史調査報告：宋代古墓を中心として

その他のタイトル	Family, Gender and Honor : Historical Research of Tombs in Western Zhejiang and Northeastern Fujian Area, Song Dynasty, China
著者	佐々木 愛, 大澤 正昭, 石川 重雄, 戸田 裕司, 小川 快之
雑誌名	東京大学経済学部資料室年報
巻	9
ページ	47-62
発行年	2019-03-31
URL	http://doi.org/10.15083/00079150

浙江西部・福建北東部歴史調査報告

宋代古墓を中心として

佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之

1 調査の目的と地域

2018年12月22日から27日にかけて、浙江省西部から福建省北東部において宋代古墓および関連史跡の現地調査を行った。本調査は宋代古墓の現地調査をとおして、当時の中国の家族やジェンダー構造を描く一助とすること、さらには墓地の修復保存という側面から宋代中国についての歴史認識の究明を目指そうとするものであり¹⁾、今回の調査で第三回目となる²⁾。旅程は下の表の通りである。

調査旅程表

日付	地 点・事 項
12月22日 (土)	14:10関西空港→15:55上海浦東空港 (MU516)
	14:30東京成田空港→17:00上海浦東空港(MU524)
	18:20上海浦東空港→19:20上海虹橋空港(MU529)
	20:20宿舎(虹橋樞紐美居酒店)
12月23日 (日)	8:42上海虹橋駅→11:00衢州駅(G1509)
	14:10~14:55孔氏南宗家廟調査
	15:00~16:00衢州市博物館参観 17:45宿舎(万豪酒店)
12月24日 (月)	8:00宿舎出発【これより専用車】
	9:40~10:55仙霞関参観
	11:00~11:35江山市保安郷(戴笠故居等)参観
	12:00~14:25江山市廿八都鎮参観
	15:00~16:00浦城県盤亭郷(呉氏家廟・李夫人墓等)調査 * 17:00浦城県仙陽鎮(真西山故居)
	17:25浦城県・宿舎(浦城大酒店)
12月25日 (火)	8:30宿舎出発
	8:50~9:15真西山故居調査
	10:00~10:30浦城県城南蓮塘鎮(真徳秀墓)調査
	13:50~14:30政和県鉄山鎮(朱森墓・政和護国寺)調査
	14:50~17:10政和県星溪郷(朱禮墓・程夫人墓)調査 19:20宿舎(福安富春大酒店)
12月26日 (水)	8:30出発
	8:40~9:10富春公園(石碑)・寺廟調査
	12:10~12:30福州市晋安区嶺頭郷(黄幹墓)調査
	14:30~15:00福州市内(開元寺)調査
	15:15宿舎(錦頤大酒店)【ここまで専用車】 16:00~17:00福州柔遠駅探索
12月27日 (木)	* 午前中 個人巡検(文廟・白塔・三坊七巷等)
	13:20福州長楽空港→14:45上海浦東空港 (MU5600)
	16:55上海浦東空港→20:55東京成田空港(MU271) 18:00上海浦東空港→21:30関西空港 (MU729)

今回の調査は、宋代当時における主要な交通ルート上であるという地域特性を念頭におきつつ、衢州から調査を開始した。衢州は浙江省の最西部に位置する。現在の衢州的経済的状況は、沿海部諸都市と比較するとやや立ち遅れている感が否めなかった。それは沿海部から遠いという立地に起因していよう。しかし、今回、孔氏南宗家廟及び衢州市博物館を参観して感じたことは、宋代当時においては、衢州は交通の要衝の地として経済的文化的に特筆すべき活況を呈していたということであり、現在とは状況が全く異なるということであった。もしそうでなければ、両宋交替に伴い、山東曲阜から避難してきた孔氏一族が、首都臨安ではなく衢州に定着することなどなかったはずである。なお、家廟の係員に孔氏一族後裔の墓の所在を尋ねてみたがわからないとのことであった。

翌日は衢州を発ち、江西・福建間の関所である仙霞関を訪れ交通ルートを体感するとともに、地元の人々の勧めもあって仙霞関のごく近くに位置していた戴笠(1897~1946)の故居を参観した。戴笠は中国国民党で秘密工作に従事した人物で、故居内部には様々な充実したパネル展示がなされ大変興味深かったが、墓と家族という我々の関心に即して言えば、戴笠夫妻および戴笠の父母の墓はともに夫妻で別葬で、戴笠の母の墓と戴笠の妻の墓が別穴ながら並置して設けられていた。夫婦別葬が主であるという我々のこれまでの江西・福建での調査結果とほぼ一致する内容である。ついでやはりほど近い廿八都鎮を訪ねた。徽式、浙

式、閩式の建築が入り交じるさまはまさしく三省
 交界の地に相応しかつた。廿八都鎮は人口僅か
 3,600 あまりながら、13 種類の方言が話され、141
 種の姓が名乗られているという。

廿八都鎮を後にして以降は、調査対象たる墓や
 祠堂を順に調査を開始した。主たる調査対象とそ
 の成果については次章以下をご覧ください。

(佐々木 愛)

2 古墓の設置地域と地勢的特徴

われわれの古墓調査も回数を重ね、調査成果の
 全体を俯瞰して、分析を進め得るような材料がそ
 ろいつつあるようである。今回もこれらにつけ加
 えられる、いくつかの新たな発見があった。調査
 現場で考え、思いついた点を簡潔にまとめておき
 たい。

今回の調査ルートの前半、つまり浙江省衢州から
 省境の山を越え、福建省の浦城県へ至るルート
 は唐代以前からの重要な交通路として知られて
 いた(青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研
 究』吉川弘文館、1963年、など)。われわれは浦
 城県を調査した後、古来のルートを少々北にはず
 れた松溪县・政和県を通過して福安市から福州へ南
 下したのである。つまり歴史ある浦城県周辺と、
 宋代以後に発展した政和県周辺が主要な調査地
 点であった。この地域の特徴を概括すれば、前者
 は広大な盆地地域で、農業と流通の中心地域であ
 り、後者は山地が迫る谷あいの地域で、水田・畑
 作農業よりも茶の栽培、あるいは林業などに有利
 な地域である。後者のうち松溪县は五代十国の南
 唐・保大年間に設置され(『太平寰宇記』巻101 建
 州の条。なお『輿地紀勝』巻129 建寧府の条所引
 『図経』は保大九年に松源县になったとする)、政
 和県は北宋・咸平5年(1002)に設置された(『輿
 地紀勝』巻129 建寧府の条所引『国朝会要』)。こ
 の両県は、唐代後半期以降の全国的な茶の流行が
 発展の契機となり、県に格上げされたのであろう。

さて、われわれは浙江省から福建省に入り、山
 間部を下ると間もなく、浦城県の広々とした水田
 地帯に入り、市街地域へと進んで行った。その印
 象は、かつて調査した武夷山市周辺—鉛山県から
 省境の山間部を下ると現れる市域—よりも平坦
 で広々としたものであった。この市域に真徳秀の
 故居があり、盆地のはずれに墓が設けられていた。
 また水田地帯を望む丘に呉育の母李氏の墓があ
 った。その後、浦城県を抜けて東進すると山が近
 くなり、茶畑が目立って増えてくる。松溪县を経
 て政和県に入ったのである。低地部分はもちろん
 水田や畑もあったが、傾斜地には茶樹が列をなし
 ていた。街には「政和白茶」という看板が見え、
 このブランドで市場に売り出しているようであ
 る。この地域に朱熹の祖父母と叔父の墓があった。

今回調査した六基の墓は、このような地勢のな
 かに点在していた。それをあらためてまとめれば
 次のようになる。

①	浦城県	真徳秀墓
②	浦城県	呉育の母・李氏墓
③	政和県	朱熹の叔父・朱檀墓
④	政和県	朱熹の祖父・朱森墓
⑤	政和県	朱熹の祖母・程夫人墓
⑥	福州市	黄榦墓

これらの墓を前回以前に調査した墓地の形式・
 立地と比較してみると、次のような点に気がつく。
 まず、いずれも低山や丘の中腹からすそ野に位置
 している点で共通であるが、墓域の構造や墓主の
 祀り方などはそれぞれの特徴があった。今回の六
 基の墓の詳細については、本稿3章以下の各章で
 取り上げている通りである。次に、これまでの調
 査と明らかに異なる特徴もあった。今回のいずれ
 の墓にも墓正面に至る、やや長い墓道はなく、鎮
 墓獸などの石像が立っていた形跡もなかった。建
 築当初からこの形式だったかどうか定かではな
 いが—明代ころの改修も予想できなくはないが—
 一、墓前など周囲の状況から見て、墓道・鎮墓獸

を設置できるような地形ではなかった。その意味するところは今後の検討に待つしかない。

もう一つ気がついた点があった。それは墓の所在地の地勢的特徴である。呉育の母・李氏墓と黄榦墓を除く4基の墓は、いずれも共通する景観の土地に建てられていた。つまり八字状、あるいはハサミ状の、末広りの二列の丘陵が交わる最奥部分の中腹に墓地が設けられていた。これは日本でいわゆるヤチ・ヤト田の地形である。日本のそれと比べれば、傾斜はかなり緩やかで、面積も広大であるが、景観の特徴を一言で言えばまさにヤチ・ヤト田的なのである。

その典型は程夫人墓であった。われわれはマイクロバスが通れないほどの細く、ゆるい坂道を、茶畑のある丘と、水田や養鶏（家鴨）場また対岸の丘を左右に見ながら25分から30分ほど歩いた。現地案内していただいた商店主は墓まで一公里だと言っていたが、実感としてはそれほど近くなく、延々と歩いた気がした。そうしてようやく道が切れたあたり、いわばヤチ・ヤト田の最奥部に、墓地に登ってゆく急な階段がつけられていた。それはブロックを積み並べたものだったから、かつては土の急坂か石段だったのであろうか。息を切らせて登ったところに、整備された程夫人墓が設けられていた。このような経路をたどったことからすれば、この墓にはもともと墓道も鎮墓獸などもなかったことがわかる。いわば丘の斜面に切り込みを入れたような形の墓地であった。

このほかの朱森墓・朱榿墓や真徳秀墓も、同じようなヤチ・ヤト田地形の最奥部に立地していた。地形図があれば説明しやすいが、残念ながら見つからなかった。わずかに真徳秀墓と思われる場所の空撮写真がGoogle Mapsに見つかったので掲げておく。ここを探したときの当該地名は「福建省浦城県蓮塘鎮顔処村」である。この地図の下部を北西から南東方向に走る道が郷道621号で、右下の集落から50メートルほど西の地点から北に細

い泥道が伸びている。この道と途中で合流する細い水渠沿いに150メートルほど進んだ左手に真徳秀墓があった。道の右手は薄い林でその向こうには農地が見えていたので、ここもヤチ・ヤト田地形の最奥部であることがわかる。そうして程夫人墓のような急な細長い階段はなかったけれども、数段の広い階段を登ったところに墓が設けられていた。



真徳秀墓附近写真（Google Mapsによる）

以上のような墓の立地条件に何らかの意味があるのかどうかは今後の検討課題である。ひとつの予想としては風水との関係が考えられるであろう。風水の詳細については今後研究しなければならないが³⁾、考え得る地勢的特徴をあげれば次のようである。墓の設置場所から見ると、左右前方に丘の尾根筋が伸びている。そこは水が流れ始めている地点でもあり、水脈の出発点である。また、墓が南ないし南東方向を向き、陽当たりがよく見晴らしがよいことも付け加えておかねばならない。遠くまで見通しがきき、非常に気持ちが良い風景であった。死者の安寧と子孫の繁栄を祈るには最適の立地だったであろう。しかし、このような地形的条件を満たすことができる土地はそれほど多くはない。この点から言えば政和県は比較的恵まれていたのではないだろうか。

とはいえ、こうした好条件が当てはまる墓ばかりではなかった。残り2基の墓の立地にも触れておかねばならない。

まず浦城県の呉育の母・李氏墓である。ここは

明代以降、そしてかなり最近に改修されたらしく、本来の姿をどれほど保っているか定かではない。その立地は道路の山側の高みで、道路越しに水田が広がっていたが、尾根筋や水流などは確認できなかった。次に、福州市の黄榦墓である。ここは高速道路を降りてから曲がりくねった山道を登り続けた先にあった。福州市街がはるか下方に見えていた。そうしてたどりついたのは、きれいに整備され芝生の墓苑をともし、立派な墓地で、賢陵园という名称も付けられていた。立地地点の特徴としては山の頂上近くで、村の人に言わせれば送電線の「鉄塔の下」であった。けれどもこの墓の正面は小高い丘になっており、墓の背後の丘と同じくらいの高さを持っていた。墓の前に立ってみると、対面の丘の圧迫感が感じられるほどである。前述の四基の墓とは比べ物にならないほどの見晴らしの悪さなのである。水流や尾根筋なども確認できなかった。この土地は、風水から言えばあまり推奨できない所だったのでなかろうか。あるいはまた福州という山がちの地域では、これ以上の土地を見つけ出すことが困難だったのであろうか。

以上、今回の調査で考えたことをまとめてみた。いずれも史料類から得られる情報ではなく、現地調査ならでの成果であった。こうした成果を古墓研究にどう位置付けてゆくのか、今後の検討課題である。(大澤正昭)

3 呉氏祠堂および李氏墓

調査3日目、浙江省に属する廿八都鎮を参観した後、福建省に入ってすぐ、浦城県盤亭郷秀里村を訪れた。北宋期に宰執にまで進んだ呉育・呉充兄弟の母である李氏の墓が現存する、との『中国文物地図集：福建分冊』（国家文物局主編、福建地図出版社、2007年）の記述に導かれてのことであった。浦城県城に向かう途上、省道から遠くない地点にある宋代古墓であるので、まずは現状を

実見しておこうという程度の問題意識しかなかった。が、凶らずも族祖顕彰の興味深いケースに触れることができ、収穫は大きかった。

秀里村に到着後、早速呉育やその眷属の墓の所在について村民に尋ねたが、誰もが「知らない」としか答えてくれず、我々も途方にくれてしまった。ガイドの機転で、村の小学校（秀里小学）を訪ねたところ、劉新英教諭から即座に「呉氏の祠堂が建設中である」との回答を得て、小学校に隣接する（完工間近と見える）祠堂に案内された。

劉教諭が呼び出して下さった呉氏族長・呉開樹氏⁴⁾から祠堂の歴史や再建の経緯など、多くの貴重なお話を聞かせていただいた上、李氏墓まで案内いただいた。

呉氏祠堂は、村のメインストリートから50メートルほど外れた高台にある。その来歴は北宋の慶暦元年（1041）にまで遡るとのことである。とりわけ嘉靖15年（1536）に重建されたものは書院なども備え、村人は「宰相府」と称していたとのことである。

おそらくは非常に広大なものであったであろう呉氏祠堂は、文化大革命で「秀里中小学」とされ、以前の建築物は全て破壊されたとのことである。そして現在、祠堂は復活しようとしている⁵⁾。

また、呉開樹氏より『呉氏文化研究』と銘打った季刊雑誌数部の恵投に与った。呉氏の歴史探源、また国内外各地の宗親会や族人の活動記録などが、彩色画像豊かに掲載され、呉氏の求心力の強さを示して余りある⁶⁾。

完工に向けて祠堂の一隅に準備されていた看板には、「浦城呉氏三賢紀念館」・「浦城呉氏三賢文化研究中心」・「盤亭郷秀里老年人活動中心」といったものだけでなく、「浦城県呉氏三賢文化旅游開発有限公司」というものまであった。単に祠堂を再建するというだけでなく、名賢を祖とする宗族を梃子とした、かなり野心的なプロジェクトが企画されているように見受けられたが、その具

体的内容まではインタビューすることはできなかった。

一方で大きな疑念もある。秀里村の村民のほとんどは呉姓とのことであるが、ではなぜ我々が村に入った当初、我々が呉育や呉育の祠堂について尋ねても、村民の誰一人として呉氏祠堂のことに思い至らなかったのであろうか。

無論、我々の質問の仕方に問題があったのかもしれない。しかし、呉姓でもない余所から赴任してきたであろう小学校教諭が、同様の質問に直ちに応答してくれたことと、まさに好対照と感じた。村の族人にも多くの無関心層がいるということも、もう一方の事実であるように思われる。

さて、呉氏祠堂の前でインタビューに応じてくださった呉開樹氏は、自らバイクを駆って、聚落から少し離れた公道沿いにある李氏墓まで案内して下さった。



李氏墓

李氏墓は1999年に浦城県文物保護単位に指定されており、現在の墳墓は2014年に族人によって修建されたものである。墓石には「宋贈一品太夫人李氏吳母之墓」の文字と、呉育・呉充ら四人の兄弟を筆頭に、玄孫までの男子の名と官職が刻まれている。

墳墓の構造自体については、『文物地図集』(前掲)の記事以上のデータが得られなかったが⁷⁾、呉開樹氏によれば、斜面を背にした墳墓の直前を横断する公道を挟んだ向かい側の平地には、かつては寺廟もあったという。しかし、現在は特に遺構と思しきものは見ることはできなかった。

呉開樹氏によれば、我々が秀里村を訪れた2日前にも大きな族人の集まりがあったとのことであった。しかし、我々が李氏墓に着いた際には、墓石の前に枯草や木切れが散らかっていたこと

から、族人が集まったからといって、特に先祖の墓に参るというわけではないことがわかる。これは墳墓を軽視しているということではなく、清明節の掃墓でもない限り、父祖の墳墓に参るという習慣・感覚がないと見るべきであろうし、礼的にも意味がないのであろう。

族人の結集の核、祖先顕彰の拠点を求める機運が発生した時、その主たる場として求められるのは、生活空間に近接した場所に設けられる祠堂なのであろう⁸⁾。(戸田裕司)

4 真徳秀墓、真西山故居(真西山祠址)

(1) 真徳秀の略歴

真徳秀(1178~1235)は南宋時代の著名な儒学者である。字は景元、後に景希と改める。号は西山で一般に西山先生と呼ばれる。朱子学を信奉し、その発展に尽力し、南宋の知識人の間で尊敬を集め、劉克莊や宋慈など多くの弟子を育てた。その一方で官僚として地方行政などでも手腕を発揮し、また、多くの上奏をしたことでも知られる。『宋史』巻437に列伝がある。

徳秀は、浦城県長楽里遷陽鎮(現在の仙陽)の人とされ、15歳で父親が亡くなったが、地元の知識人の楊圭に目をかけられ、彼の息子とともに教育を受け、圭の娘を妻に迎えた。寧宗皇帝の慶元5年(1199)に進士に及第し、南劍州判官となる。開禧元年(1205)には博学宏詞科にも及第し、太学博士や知泉州などを歴任した。

専権宰相の史弥遠が亡くなり、端平元年(1234)に朱子学を重んじる理宗皇帝の親政が始まると、戸部尚書や翰林学士に抜擢され、翌年副宰相格の参知政事となり、理宗皇帝や著名な儒学者の魏了翁とともに、端平の更化と呼ばれる朱子学を指針とする政治改革を推し進めたが、間もなく58歳で亡くなった。

諡は文忠で、明の成化3年(1467)には浦城伯に追封され、真文忠公祠が建てられ、清代には知

県（県知事）が祭祀を主催していた。徳秀は朱熹の学問を継承し、居敬（常に心を引き締め安静を心がける精神）を習得することを重視する姿勢を取ったとされる。彼が著した『心経』は、日本や朝鮮半島の儒学教育の場で広く読まれた。なお、息子の志道は父親の恩蔭により、官職につき、戸部侍郎などを務め、朱熹と関係が深い宰相で宗室の趙汝愚の息子で地方官などを務めた崇度の娘を嫁に迎えている。

(2) 真徳秀墓

徳秀の墓の所在地は、光緒統修『浦城県志』（以下、『浦城県志』と略称）巻 30、宅墓には「孝悌里株林山」（現在の浦城県城南蓮塘鎮顔処村真処山）と記されている。県の中心部から約 10 キロメートルのところである。実際に車で訪れてみると、周囲は緑豊かな農村という趣で、墓は、郷道から両側に木々が生い茂る小道を時折見える畑を眺めながら 10 分余り歩いたところ、道路脇を少し登った場所にあった。



真徳秀墓

墓地は、林の中にあり、規模は比較的大きい。丘を背にし、東北に面して作られていて、石積による二段構造となっている。正面には篆書で「宋西山真文忠公墓」と書かれた墓石が置かれていた。正面に向かって右側には「第一批県級文物保護単位、真徳秀墓、浦城県人民政府、一九八四年十月一日立」と刻まれた石碑が立てられていた。

墓を探す際に、ガイドが複数の村民に所在地を

尋ねたところ、村民たちは皆その場所を知っている様子で、このことから地元では有名な場所のように思われた。また、案内をしてくれた村民の話では、徳秀の墓は盗掘を防ぐために 36 か所も作られたとされていて本当の墓は実はどこかわからないが、この墓には近くに小屋があつて最近まで子孫が住み墓守していたのでこここそ真徳秀の墓に違いない、いまでも族人はたまに来ることがあるが、宗族による祭祀活動は行われておらず、真氏の祠堂もあるものの荒廃している、とのことであった。このことから、近代までは宗族の活動も行われ、彼らが維持に関わっていたようであるが、現在は宗族ではなく行政が墓の管理にあたっているように思われた。

なお、徳秀の家族の墓については、『浦城県志』巻 30、古蹟に記載があり、曾祖父の齊と曾祖母の万氏（陳氏であるとの説もあり）の墓は合葬で、「安楽里壺山」にあり、祖父の京の墓は「長楽里仙陽鎮西山」に、父の嵩の墓は「新興里真家山」（名前から真氏一族の墓所と思われる）にあることが確認でき、曾祖父・祖父・父・本人の墓は同じ県にあるものの分散していることが分かる。また、曾祖父は合葬であることが書かれているのに対し、その他の人々についてはその記載がなく、実見した徳秀墓でも夫人の墓の存在は確認できなかったので、彼らは夫人と合葬になっていない可能性が高いと考えられる。

(3) 真西山故居（真西山祠址）

徳秀の故居とされる場所は、明の張儉の「西山先生祠堂記」（『浦城県志』巻 35、記）や『浦城県志』巻 13、祠祀、同巻 30、古蹟、及び真西山故居のパネルなどによれば二か所あることが確認できる。一か所は「長楽里仙陽西山」（現在の浦城県仙陽鎮西山下）で、父の嵩が仙陽の山水の「佳勝」を愛してこの地に移り住んだとされ、この地に祖父の京の墓も築かれている。徳秀は当初この地に

住み、西山精舎・睦亭という施設を設けた。清の光緒 14 年 (1888) に署県の盧慶雲が寄付を呼び掛けて真西山祠が建てられた。光緒 23 年 (1897) には知県の翁天祐が祭田 (祭祀費用を賄うための耕地) を寄付している。現在は「(真) 西山故居」と呼ばれている。

もう一か所は「東隅里城隍廟右」で、徳秀が宝慶 3 年 (1227) に転居して、共極堂という施設を設けた場所である。徳秀の子孫の真淵子が、元の延祐年間 (1314~1320) にその脇に西山書院を建てた。明の成化 3 年 (1467) には、「三元宰相」として知られる商輅の上奏と勅許により真文忠公祠 (西山祠) が建てられ、景泰 5 年 (1454) には知県の何俊が改修を行い、子孫から賢者を選んで祭祀をさせた。

その後も地方官によって度々改修が行われ、康熙年間 (1662~1722) には、子孫の真祖蔭が隣家を買って増築を行い、康熙 45 年 (1706) には康熙帝御書の「力明正学」の匾額が下賜された。さらに同治 3 年 (1864) には、子孫が地元の郷紳とともに資金を捻出して改修を行っている。しかし、現在の所在地は確認できなかった。そこで、今回の調査では、前者の真西山故居を訪れた。



真西山故居の真徳秀像

真西山故居は市街地の中にあり、門を入り前庭を進むと大きな建物があり、無料開放されていた。

入口の脇には、「愛国主義教育基地、南平市人民政府」「浦城県廉政教育基地」「浦城県真徳秀文化研究会」「厦門大学浦城県考古実習基地、2017 年 5 月 18 日」などのプレートが貼られており、現在は地方政府や大学の研修施設になっていることが確認できた。このことから地方政府が、地元出身の徳秀を顕彰し、活用していることが窺える。

建物は、四合院になっており、母屋には「真徳秀書院国学堂」との垂れ幕と、彩色の真徳秀の像が安置されていた。建物内のパネルは、経歴、家系図、写真などがあり、比較的充実した内容であった。管理人の金栄章氏の話によれば、真氏一族はこの街には居らず、海外にいる者が多く、現在の真西山故居には全く関与していないとのことであり、墓と同様に関係はほとんどなく、主に行政がその管理にあたっているように思われた。

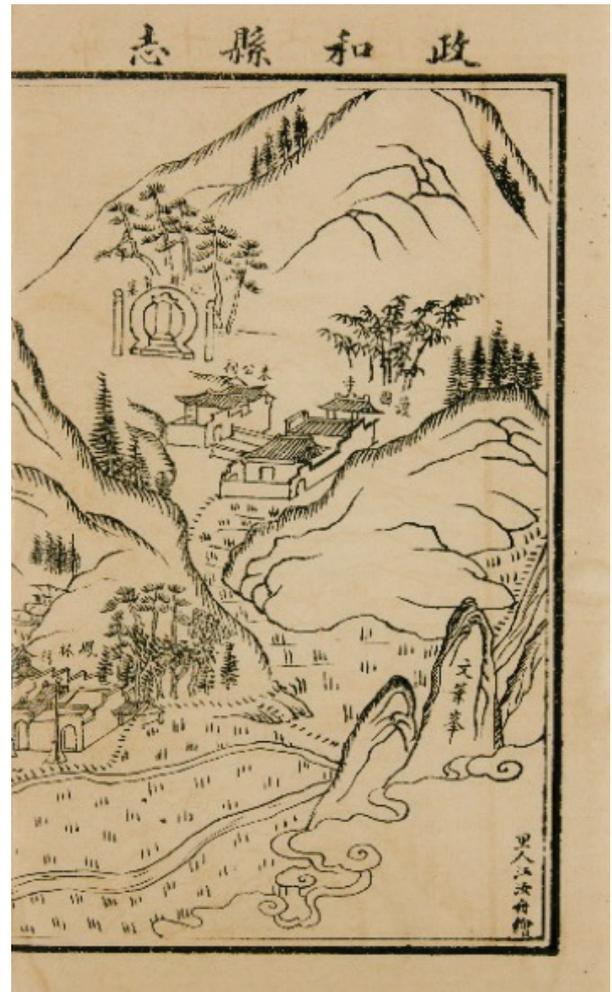
(小川快之)

5 政和護国寺

12 月 25 日午後 3 時頃、我々は朱熹の祖父である朱森の墓を訪ねて政和護国寺に到着した。朱森については別章で述べるので、ここでは主に長年月にわたり朱森の墓を管理している政和護国寺について記すこととしよう。政和護国寺は、南平市鉄山鎮鳳林村の東に位置する。地方志類を繰ってみても寺史にかかわる詳細な記事は見られないが、瞥見した二つの『政和県志』の記事を中心に述べてみたい。その二つとは、錢鴻文等修、李熙等纂『政和県志』(民国 8 年排印本)〔略称：(民国)『政和県志』〕、清・乾隆 26 年修、道光 12 年程鵬里等補刊『政和県志』〔略称：(清乾隆・道光)『政和県志』〕である。朱森がここに埋葬された経緯については第 6 章に詳しいが、地方志ではどのように記されているのかという点については触れていないので、以下に述べておきたい。(清乾隆・道光)『政和県志』卷 33 流寓、宋に「朱森、字は良材、徽州婺源の人なり。退翁と號し、又は

退林と稱す。韋齋（＝朱松の号）の父、文公（＝朱熹）の祖なり。韋齋尉政の時、父を迎え官舎に就養し焉に卒す。睦（浙江の睦州）、方臘の亂に寇され道梗がれ、權りに護國寺に厝く。後ち山水明秀を以て焉に葬る。……」とみえている。北宋・徽宗の宣和2年（1120）に朱森は病没し、同年に起こった方臘の乱により行き場を失い、後に山水明秀な地である護國寺に葬られたという。この点に関して朱子の年譜をまとめた東景南『朱熹年譜長編』は「祖森、字良材。少務科擧、不仕。卒於宣和二年、時方臘亂、以貧不能歸、葬政和縣護國寺側。」とし、さらに「按ずるに」として附された詳細な注の中で諸資料についての訂誤を加えている⁹⁾。

本寺の創建について、まず（民国）『政和県志』卷7名勝をみると「護國寺、在下里蓮花峰下。五代晉天福四年、僧掌軒建。宋・朱松「護國上方」詩：久知喧寂兩空華、分別應緣一念邪。爲問脫靴吟芍藥、何如煮茗對梅花。明・郭斯厓「游護國寺」詩：……」とある。これによれば、本寺は五代時代の後晉・天福4年（940）、僧掌軒の創建とする。ちなみに（清乾隆・道光）『政和県志』卷9、人物、附寺觀では護國寺の創建に関して「唐永隆元年、僧軒掌建。」と記し、唐・高宗の永隆元年（680）に僧軒掌が建てたのを濫觴とする。また（乾隆）『福建通志』卷63、古蹟では「護國寺、五代晉天福中建。旁有宋朱森墓。」とし、（同治重纂）『福建通志』卷265、寺觀では「護國寺、在感化上里。五代晉天福三年建。」としている。この感化上里であるが、（清乾隆・道光）『政和県志』卷1、地理には「蓮花峰、感化下里に在り。山勢峭拔にして、紫翠稠疊し、下に護國禪院有り。宋の朱獻靖公（＝朱松）、其の父良材を院西廡外に葬る、即ち文公（＝朱熹）の祖なり。」と説明される。本寺の創建についても、各地方志に混乱が生じていることがわかる。



民国8年『政和県志』卷1政和県志図 第17図
（公財）東洋文庫蔵 鳳林村の朱森墓、護國寺、朱公祀が描かれる
残念ながら（民国）『政和県志』には、この後の寺史にかかわる記事はない。ただ朱森の子、すなわち朱熹の父である宋・朱松の「護國上方」詩と明・郭斯厓の「游護國寺」詩を載せているのみである。郭斯厓なる人物は、黄裳とともに（永樂）『政和県志』の編纂に携わったことでも知られる。朱松の「護國上方」詩については、宋・朱松『韋齋集』にも「書護國上方」と題する同様の七言絶句の詩がみられる。宋の朱松が護國寺を詠んだものである。南宋の朱熹についても『朱子文集』正集卷1、詩1に「十月朔旦懷先隴作」と題して「十月氣候變、獨懷霜露悽。僧廬寄楸檟、饋奠失茲時。竹柏翳陰岡、華林敞神扉。汎掃託羣隸、瞻護頌名

緇。封塋諒久安、千里一獻歆。持身慕前烈、御訓倘在斯。」と詩が残され、この詩は朱熹が政和の祭礼に際して祖父朱森の墓と護国寺を詠んだものとされる¹⁰⁾。のち明の成化14年(1478)、提学僉事の周孟中が邑人である致仕教諭の呉憲の言により墓前に祠を立てることを謀り、邑民の王窓が資金を捻出して啓賢祠をつくり朱森を祀った((民国)『政和県志』卷22 祠祀、啓賢祠)。



政和護国寺の堂内

さて、こんにちの護国寺であるが、我々が訪れた時には、齋堂やらの堂宇、宿泊施設らしき各種建物も建築工事中であった。1994年に編纂された林天福主編『政和県志』(政和県地方志編纂委員会編、中華書局出版、742-743頁)によれば、文化大革命により周辺の寺廟も破壊され、中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議(1978年)を経て宗教政策も確定し、1980年以後、寺廟等の復興再建が始まったという。鳳林村の護国寺もこうした経緯をたどっている。堂内にある「法訊」「仏訊」見ると、「政和護国寺地蔵殿落成開光法会大典」と題する張り紙が目にとまった。以下に紹介してみよう(原文簡体字)。

法訊

政和護国寺地蔵殿落成開光法会大典
政和県鉄山鎮鳳林村護国寺、将隆重举行地蔵菩薩

和両尊送童子開光法会典礼；政和護国寺謹定于

二〇一八年十一月十七日 星期六
戊戌年十月初十日

(巳時)開光。迎着清晨的曙光、四海高僧、十方信衆、雲集千年古刹、歡迎各界人士・檀越・護法・居士・善信衆等、共沐佛光、共沾法喜。

在此誠懇邀請各方僧尼參加、開光法会盛典、祈願世界和平・国家昌盛・人民安樂・佛日增輝・僧衆和合・法輪常轉・正法久住；各界人士・檀越・護法・居士・善信衆等前往政和護国寺參加開光法会、士農工商皆得利、居家信衆人丁興旺；步步高升・身体健康・福慧双增・學業上進、金榜題名；事業興旺、財源廣進・求子得子・心想事成・一帆風順、万事如意、共修福慧、同沾法益・功德無量。

注：本日開光走弥陀一天。

開光典礼敬供：

花・果・糕天等等

如意齋一堂・羅漢齋一堂

隨喜齋一堂・豆腐齋一堂

圓滿供等

普佛

隨喜發心認供・認供方式：

1. 本寺課堂登記認供；

2. 微信轉賬認供(請務必備注姓名及具体用途)

連係人：遠宝(理遠)法師

連係電話：……

客堂電話：……

政和護国寺客堂 白

二〇一八年八月二十八日

これは地蔵殿落成法会の連絡及び要領であり、つい最近のことである。過去のこうした法会が盛大に営まれた様子は、ネット上の映像「南平政和鳳林護国禅寺開光慶典2016.11.27」¹¹⁾でもうかがわれる。また大雄宝殿、観音殿、仏像の修繕等にも村里内外の信者や檀越の布施が集まり、千元から五万元の布施をした人名が功德碑、功德名單と

して碑に刻まれている。如上の「法訊」末尾にみえる遠宝法師が護国寺の現在の住持であり、すこしお話をする機会も得た。現在本寺にいる僧侶は遠宝法師お一人とのことであつた。我々は信者さんであろうご婦人の茶・菓子の接待を受け、本寺を後にした。

(石川重雄)

6 朱熹親族墓（朱森墓・程夫人墓・朱櫿墓）

(1) 墓の立地と修建経緯

朱熹の祖父朱森の墓と祖母程夫人の墓はともに政和県にある。しかし同葬はされていない。朱松の墓は政和県鉄山鎮鳳林村・政和護国寺の境内に、また程夫人の墓は星溪郷富美村熨溪鉄炉嶺にあった。朱森の墓から程夫人の墓までは車で 30 分ほどの距離があり、互いにかなり離れていた。

二つの墓が作られた経緯をみてみよう。

朱熹の父・朱松の文集『韋齋集』巻 12「先君行状」の末文は次の文で締めくくられる。「建州政和の官舎に於いて卒す。享年若干。程氏を娶る。三男。松、進士に挙げられ、迪功郎、初め政和に尉たり。次櫿、次樺。二女未だ人に適はず。將に某年月日を以て政和護国寺の側に寓葬せんとす。謹んで状す。」つまり朱森は、息子朱松の科挙登台と政和県への任官に伴って、政和県の官舎へ移り住んだもののこの地で亡くなり、葬られたということが分かる。宋代の士大夫たちは墓の管理依頼上の便宜から寺に父祖の墓をつくることを好んでおり¹²⁾、朱松もその例外ではなかったということであろう。

朱森死去時、程夫人は健在で、朱松らと同居していた。朱松は父の死去に伴い辞職して喪に服し、喪明けとともに南劍州尤溪県尉に異動した。この異動先の尤溪県で朱熹は誕生している。そののち朱松は館職考試を突破して秘書省正字に叙せられた。そのとき朱松は尤溪県に家族を残し、単身でみやこ臨安に滞在していたのであるが、秘書省

正字叙任からわずか半年後、程夫人が亡くなった。朱松は辞職し尤溪県に残してきた家族をあげて政和県星溪へ行き、墓を建て埋葬し、殯の時を過ごしたのであつた。

この頃のことを朱松は次のように記す。「甲寅の秋、身大難に罹り、荼毒流離し、自分必死にして、而して又た尽室餓寒の憂いあり、朝に夕を謀らず」（『韋齋集』巻 7 上趙丞相劄記）。政和に寓居し、墓を建てるということは当時の朱松の経済状態としては重い負担であつたことがうかがえる。なお、東景南氏は朱松が長男と次男を亡くしたのはこの喪中であると論じている。朱熹は生き残った三男であつた。

さて、立墓にあたっての経済的便宜ということでは、当時居住していた尤溪に墓を建てるほうが負担が少なく済んだ筈である。しかしあえて一家をあげて政和へ寓居してまで墓を建てたということは、朱森と同じ地に墓をつくろうとしたという強い意志が認められる。官僚として任地を転転とする身であれば、父と母の墓があまりに遠く離れていれば墓参が著しく困難となるからであろう。しかしここまでの努力をして政和の地に墓を設けたにしては、父母の墓は互いに離れすぎている。朱松は護国寺の父の墓に母を合葬しようとはせず、また広大であつた護国寺内に墓所を定めることもせず、全く異なる新たな地を探して墓を造営したのであつた。

実際に我々が程夫人墓を見て感じたのは、ここはまことに風水宝地だということであつた。確かに朱森墓も風水宝地であつたが、両者を比較すると、素人目からは、程夫人墓のほうが風水的にはより優れた場所のように感じられた。朱森墓は位置がやや西によりすぎているのに対し、程夫人墓はヤチ・ヤト田地形のまさにヘソともいふべき見事な地点に設けられており、朱松が母のために風水適地を求めようとした努力がまざまざと感じられた。前掲の史料からは、朱松一家は母の服喪

の間、経済的に困窮していたことがうかがえるが、それは一家で尤溪から政和に移動し、墓地の購入や建造に多額の出費を余儀なくされたことに起因している。朱松はこれほどの努力を払って母のために良い墓を建造しようとしたのであるから、もし父母を同葬したい、しなければならないと考えていたのであれば、万難を排して父母を同葬したであろう。それをそのようにしなかったということは、父母を同葬しなければならないという意識がなかったのだと考えられる。

なお、今回は朱松の弟・朱樞の墓とされる古墓も参観することができた。墓の建造の経緯は未詳である。朱樞が死去したのは1144年ということであり、朱松が建安の居宅で死去した翌年のことである。当時、朱熹はまだ数えで14歳と年弱であり、遺族の朱熹母子は経済的に苦境にあった。朱松の葬儀や朱熹母子のその後の生活の一切は、朱松の友人劉子羽の援助によって行われた。朱熹母子は劉子羽の地元嵩安県五夫里に移り住み、翌年1144年に朱松を五夫里で埋葬している。つまり朱樞の死去はそのようななかでのことであり、朱熹母子は朱樞の葬儀や埋葬の選定等には関与していなかったと推察される。

(2) 墓の現状と朱熹の顕彰

前日に滞在した浦城県が想定外に大きな都市であったのに相反して、政和県は山間の小さな田舎町の装いであった。幹線道路沿いの商店は店を閉じているものも多くあり、あまり経済的に活況であるようには見えなかったが、その一方、郊外に広がる茶畑は印象的だった。朱熹の父・朱松が政和県尉に在職中、茶の栽培を奨励したという逸話が思い出される。

政和県は朱熹ゆかりの地として町おこしをめざしているとみえ、政和県の中心部の道路標識には「朱熹故里」とあるのを見かけたが、しかしこの地が朱熹故里であることを証する史蹟である

朱森や程夫人の墓については町の人にはあまり知らない様子であった。さらに朱森の墓の所在地である鉄山鎮鳳林村へ移動し、ガイドが村の老人たちに「朱子のおじいさんのお墓はどこか知りませんか」と尋ねると、「豚を飼っているおじいさん？」と聞き返されている始末であった。朱と猪の発音が一緒だとはいえ、あまりな話である。やがてある村人から教えられたとおりに行くと、曲がり角に案内表示が出ていた。矢印前方220メートルという注記とともに「政和護国寺」「朱森記念園」に加え、なんと「朱熹誕生地(壟寺)」とも書かれていた。誕生地が墳墓寺であるということ自体も意味不明であるが、何と云っても、朱熹が誕生したのは尤溪县であり、決して政和護国寺ではない。県政府側が朱熹ゆかりの地であることを強調しようとするあまり、話を盛りすぎたと推察される。

政和護国寺がいまだに現存していたのは感銘深かった。政和護国寺については5章に詳しいので割愛する。朱森の墓は寺のすぐ隣、西北後方の小高いところにあつて、東から東南方向に寺を見下ろす位置にあつた。朱熹の墓と同じようなしつらえで、卵型の石で土饅頭や周囲が蔽われ、全体が鳳型に整備されている。「宋承事郎朱森墓」と記された墓碑は、明代成化15年(1479)、福建按察司僉事・周孟仲と記されており、福建各地の朱熹関係の史蹟が整備されていった時期と一致する。また、1996年、世界朱氏联合会会長朱祥南による捐資修建を記念する石碑も建てられていた。

富美村に移動する。富美村はいくつかの自然村によって構成されているが、最も人々が賑わっていた集落・林屯に行き、程氏墓はどこか何人もの人に尋ねたが、知らないという答えが返るばかり。やがてある村人が、墓ならここだと親切に案内してくれた。集落中心部をつらぬく川沿いの道を奥へ20分ほど歩き、ゆきどまりにある小山のうえに墓はあつた。前方に広く視界が開け、なかなか良い風水の地と思われたが、墓碑には程氏の名

ではなく、「宋承信郎朱公禋墓」と書かれていた。朱禋とは朱松の弟、つまり朱熹の叔父である。我々はこのに来るまで朱禋墓の存在を知らなかった。現地巡見したからこそその発見であった。



朱禋墓

墓脇の石碑によれば、2009年に盗掘をきっかけに発見され、2015年に政和県文物保護単位に指定され、2016年に重修したとのことである。我々が参照している『中国文物地図集：福建分冊』は2007年の出版であるから、この朱禋の墓が掲載されていないのは当然であった。我々を案内してくれた村人は、墓

の手前のやや平坦になっている茶畑を差して、ここにはかつて、寺があったのだと教えてくれた。確かに墓脇の石碑にも「雲根書院朱氏源流の記載によれば、朱禋は富美村延福寺側に葬られた」とあった。なお、朱禋墓重建の主体は「政和県朱子後裔聯誼会」と墓碑に記されているが、政和県内には朱熹後裔が居住していないので、おそらく政和県側が主導して他地域に居住している朱熹後裔に働きかけつつ整備を行ったものと推察される。朱熹関係の史蹟や朱熹親族の墓は世界朱氏聯合会（あるいはその前身の韓国朱氏中央宗親会）の拠金により整備されることが多いが、朱禋墓の整備については関与しなかったと見える。朱禋は朱熹の直系親族でない所以かもしれない。

次に程夫人墓の在処を村人に尋ねたが、なかなか知っているという人がみつからない。ようやく知っている人に出会ったところ、この林屯の集落付近ではなく、車で行く必要がある、もと来た道を引き返して左折するということであって行ってみたが、左折地点に案内板が設置されておらず

また周囲には民家がないため聞くこともできない。洋尾という集落まで戻り、村委員会を訪ねてみたが不在。村委近くの雑貨店の主人に尋ねると知っているということで、親切に店を閉めて墓まで案内してくれた。

曲がり角からは徒歩で進むことになった。道幅が狭い農道で、運転手が先に進むのを回避したからである。墓まで徒歩でまっすぐ30分ほど。周囲は山に囲まれ、道周辺のみが平地で畑が続いている。行き止まりの地点には農家の小屋がありその脇に「源远流長」と大書された石碑が立てられていた。2009年の立碑で、「世界朱氏聯合会名誉会長朱祥南・会長朱茂南重修程夫人墓捐建」と刻まれていた。小屋と石碑の後方にある小山の中腹に程夫人墓はあった。



程夫人墓

程夫人墓は全体が鳳型で、斜面を利用し墓石を建てる形式がとられ、河卵石は使われていない。中心の墓碑には「宋朝朱森夫人程氏五娘之墓」と記され、墓碑を中心に血脈の伝承を称える語などをきざんだ石がはめ込まれていた。また墓の後方上部には2009年の重修以前に建てられていた墓碑がおかれ、「同治丁卯年 朱母程夫人墓」と記されていた。程夫人は朱松の母であるから朱母との表現は間違っているわけではないが、しかし程夫人が顕彰されるのは朱松の母というよりは朱熹の祖母という理由であることを考えると、あえて「朱母」と記した同治年間の墓碑は若干話を盛っているように思われた。この同治年間の碑と比べると、2009年の新造の墓碑の表現はまったく正確である。

程夫人の墓の両脇には、2009年に同時に修復さ

れたと覚しき朱熹末裔の墓があった。向かって左には「慈母頼頭蓮之墓」、右には「朱文公廿三代孫媳劉宜春墓」とあった。両者ともに墓石にはその親族関係が記されてあったが年代記載がないのでいつの人かはわからない。前者で注目されるのは慈母という表現で、慈母とは礼制上は父の妾である。後世、慈母という語は単に「優しい母」という意味で使われることもあるが、もし経書通りの意味だとすれば妾も正妻なみの立派な墓に埋葬されたということになる。後者は朱熹から廿三代孫ということであるから清朝時代の人であろうか。

さて、程夫人の墓をふくめこの三者いずれも夫婦別葬、女性単独の墓である。滋賀秀三氏『中国家族法の原理』（創文社、1967年）においては、夫婦合葬の原則が、「夫婦一体」原則として表現される夫婦の財産権のありようを裏付けるものとされている。しかし我々は江西―福建地域におけるこれまでの調査において夫婦別葬・女性単独墓を広く目にできており、今回の調査でもその状況を改めて確認することができた。

(佐々木 愛)

7 黄榦墓

(1) 墓の立地と修建経緯

黄榦（1152～1221）朱熹の高弟で娘婿、朱子学の正宗を継いだとみなされる人物である。墓の所在地は福州市寿山郷江南竹村庖羲谷。福州市街から北へ車で1時間弱、急カーブの道をたどって山を登り一山越えた山間の里にある。この辺りは印鑑等工芸品の材料として著名な寿山石の産地として知られているとのことであった。

『閩都記』巻24 湖北侯官勝蹟や『福州府志』巻23 塚墓の記述によれば、そもそもここには黄榦の父・黄瑀の墓があり、父の墓の傍に黄榦の墓も建てられたと記されている。黄榦の甥や門人の手になる黄榦の「年譜」によれば、黄瑀が死去した乾

道4年（1168）時点で黄榦はまだ17歳と若く、葬地選びの主導権は持っていなかっただろう。

朱熹が黄榦からの依頼を受けて執筆した黄瑀の墓誌銘には「懐安県靈山郷長箕山」とその葬地が記されている。しかし「年譜」には黄瑀墓の所在地の記載がない一方で、慶元3年（1197）に死去した母葉氏の喪葬については詳しい。黄榦が仲兄とともに「箕山先塋の精舎」にて停柩し、もがりの時を過ごしたこと、そして「母夫人を先塋に附葬」したことが記される。「長箕山」と「箕山」という地名表記の近似性から、黄瑀夫妻の墓は比較的近いところにあったことは推定できるが、「先塋」が夫の墓だとは断定できないため、夫婦同葬であったとまでは確定できない。ともあれ、我々にとって興味深いのは、黄榦の遺族や門人など黄榦に近しかった「年譜」の著者たちが、朱文公文集掲載の黄瑀の墓誌銘を読んでいるにもかかわらず、父の黄瑀墓について全く情報を記さずに母葉氏の墓についてのみ一方的に多く情報を記載していること、そして明代の地方志では母葉氏の墓については何ら記載されずに黄瑀墓の隣りに黄榦墓が作られたと父系関係が強調される記載になっていることである。滋賀秀三氏『中国家族法の原理』で示されるような強い父系の家族原理は滋賀氏のいうように漢代以来2千年継承されたものではなく、明代に形成されたものではないかというのが我々の作業仮説であるが¹³⁾、この仮説と積極的に関連する事例といえよう。

さて、黄榦墓は夫婦同葬の墓である。「年譜」によれば、黄榦は嘉定14年（1221）3月に病没した。4月に高峯書院で停柩しもがりを行っていたところ、8月に夫人朱氏（朱熹の三女朱兌）が死去した。夫の死去からわずか133日、悲しみのあまりに病んで亡くなったと「年譜」には記されている。そして10月に「高峯之原」に両者を合葬したのだという。このような状況なのであれば、黄榦夫妻が同葬であるのは非常に納得できる。さ

らに着目したいのは、「年譜」における黄榦夫妻の葬地は「高峯之原」、父ないし母の葬地は「長箕山」と表現が異なっており、「年譜」を見ているかぎりでは、黄瑀夫妻と黄榦夫妻の墓が近接しているとは分からないことである。明代以降の地方誌の記述が何に由って生まれたのか、あらためて興味深く感じられる。

(2) 墓の現状と黄榦の顕彰

江南竹村庖羲谷を訪れた我々は、村人に墓の在処を聞こうという段になった。これまで墓を尋ねては知らないといわれることに慣れてきた我々にとって、村人がみな黄榦墓のありかを知っていたことはまず意外であったが、黄榦墓に到着したとたん、村人が知っていたのも当然だと納得した。そこには大型バスが 10 台は軽く止められるだろう広い駐車場があり、門には「賢陵园」と記されており、まるで皇帝陵かと思われた。墓祭の季節ともなれば、おそらく黄姓の族人が大挙してここを訪れるのであろう。門の辺りには様々な石碑をおいた碑廊が設けられ、中に入っていくと、広大な敷地に青青とした芝生が広がり、植栽豊かに美しく整備されている様子が眼前に広がった。また我々の目を引いたのは、墓周辺の地形等が人為的に加工されていたことだった。おそらくはこの黄榦墓はそもそもあまり風水のよい立地ではなかったため、風水改良のための様々な工夫を試みたのであろう。現在の黄榦墓は、福州出身の実業家黄如論氏（世紀金源集団創業者）をはじめとする実業家たちが黄氏裔孫を自認し巨額の資金を投じて整備している¹⁴⁾。

黄榦墓の敷地やしつらえは広大であったが、石で蔽われた土饅頭の墓そのものは通常のささやかな大きさのもので、墓碑には「宋大儒文肅黄公」「配徽国朱氏夫人」の 2 人の名が並べて記されていた。黄榦が朱子の正宗を継ぐ存在と博く認められていたのも、朱熹の娘婿だったことも関係して

いるためでもあり、その意味でも夫婦が合葬されたのには意味があると墓を見ながら改めて思えた。黄瑀墓を探したが、見当たらなかった。墓の管理人に聞いてみたところ、黄榦の父の墓があるなどという話は聞いたこともないという答えであった。結局、黄瑀墓との関係性は現地巡見を経ても不明であった。後考を待つのみである。



黄榦墓

現在の黄榦墓の威容に驚いた我々であったが、その後福州市内に入ったところ、黄榦の顕彰あるいは黄榦の顕彰を通じた朱熹の称揚という活動は少なくとも現時点では黄氏後裔の間に限定され、地域的に共有されているわけではないようであった。調査最終日に福州文廟を参観したが、朱熹が四配の次に祭られているようなことはなかったし、黄榦について何か特別の扱いがされていることもなかった。『中国文物地図・福建分冊』によれば、文廟の通りを挟んで西側には「朱熹旧居遺址」があると書かれていたが、その辺りをくまなく歩き、地元の人にどれほど尋ねても探し当てられず、三坊七巷の案内員やあげくは文廟の係員にも聞いたことがないといわれるばかりであった。また文廟の北側に黄榦を祭る祠堂があることを知り探したところ、ようやく見つかったのは「董見龍先生祠」であった。門の外に 2007 年立碑の石碑があり、裏面の解説文には、董見龍（1557～1639）は明代、工部右侍郎等を務めた人物であ

ることと、黄榦と陳淳も同じ地に祭られていて、歴史的には「三先生の祠」とも呼ばれていた、と書かれていた。つまり福州の人にとっては黄榦や陳淳より董見龍なる人物のほうが優先されて記念される人物として位置づけられていたのである。そして黄榦・陳淳ともに著名な朱熹高弟とはいえ、福州出身の黄榦が漳州出身の陳淳と並列される存在であり特に優越していなかったのである。これはまったく想定外の状況であった。

もちろん実際の祭られかたによって黄榦と陳淳の間に差がつけられている可能性はある。しかし残念ながらこの「董見龍先生祠」は施錠されていて実見できなかつた。警備員に粘って交渉したが、警備員は気の毒そうに上司の許可がなければ開けられないというばかりであった。この「董見龍先生祠」一帯の建物は古びていたが、ごく近くの地点まで、朱徽坊という古街の整備工事が広がってきており、今回の参観停止はおそらくはこの古街整備工事と関わるものと思われた。もし数年後再訪したら、その時にはこの祠は美々しく重修され、朱徽坊観光の一つの目玉として立ち現れることになるのかもしれない。しかしながら現状では福州市域での黄榦顕彰はきわめてささやかな状態であり、威容を誇る黄榦墓とは鮮やかな対照性をなしていた。墓と祠堂の関係性や、宗族と地域社会および地方政府との関係など深めるべき

論点が多いことをあらためて感じさせられた。

(佐々木 愛)

8 おわりに

今回の調査は、浙江・江西・福建の所謂三省交界の地から福建へ入る交通の大動脈ルートにほぼ沿って調査を行った。結果としては、江西・福建で広く見られた夫婦別葬の形式がやはり多く観察できる結果となり、これまでの調査結果を補強するとともに、墓の立地等からも同葬・別葬に対する観念をより深く明らかにすることができたと考える。夫婦別葬は滋賀秀三氏『中国家族法の原理』とは逆行する墓葬形式であり、この墓葬形式をとる地域を明確化していくことが、今後の我々の中核的な課題となってくると思われる。

(佐々木 愛)

【謝辞】本調査は科学研究費補助金基盤B（海外調査）17H04525「宋代古墓調査にもとづく伝統中国の社会・家族・ジェンダーの歴史的研究」の採択に基づくものである。

(ささき めぐみ：島根大学法文学部教授)

(おおさわ まさあき：(公財)東洋文庫研究員)

(いしかわ しげお：(公財)東洋文庫研究員)

(とだ ゆうじ：常葉大学外国語学部教授)

(おがわ よしゆき：国士舘大学文学部特任教授)

- 1) 調査研究目的については、佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之「江西省歴史調査報告：宋代古墓を中心として（吉安・撫州篇）」（『社会文化論集：島根大学法文学部社会文化学科紀要』14、2018年）に詳述しておりここでは割愛する。
- 2) 第1回調査については前掲注1の調査報告、第2回調査については佐々木愛「浙江省歴史調査報告：宋代古墓を中心として（武義・天台山・寧波篇）」（『東京大学経済学部資料室年報』8、2018年）に詳しい。
- 3) 本稿脱稿後、宋代の風水に関して次の論文が発表されていることを教えていただいた。廖威恵著、上内健司訳「墓葬と風水：宋代における地理師の社会的地位」（『都市文化研究』10、2008年）。この中で墓相に関連する風水の一例として、程頤の「美地」の条件があげられている。それは「土色光潤、草木茂盛」および「五患」を避けること、つまり「須使異日不為道路、不為城郭、不為溝池、不為貴勢所奪、不為耕犁所及」であったという。
- 4) 秀里呉氏の始祖・呉待問（呉育・呉充兄弟の父）から数えて第34世。開樹氏によれば、現在村で一番若い世代は第37世とのことである。
- 5) 呉待問が秀里に居を定めて以降の呉氏とその祠堂の歴史については、呉開樹・呉金武「父子五進士兄弟両宰相：呉氏宰相故居秀里」（『呉氏文化研究』2018年1期）に詳述されている。

-
- 6) 呉儀（元共産党政治局委員・国務院副総理）や、台湾の呉伯雄（元国民党主席代理・総統府秘書長）や呉敦義（元副総統・国民党主席）といった大物政治家も族人とのことである。なお、『呉氏文化研究』は2018年1期が「総第9期」であったので、2016年から刊行が開始されたものと思われる。
 - 7) 参考までに、『中国文物地図集』の記事を再掲する。「参知政事呉育・同平章事呉充の母親之墓。墓坐東向西、洞式磚構、面寛5米、高2.6米。墓前有碑、方首、高0.92米、寛0.53米、上刻“宋贈一品太夫人李氏呉母之墓”」。
 - 8) 著名な歴史人物を地方政府が大々的に顕彰するケースも（とりわけ近年は）多く見られるが、これはもはや血縁集団から離れた、別次元の現象であろう。
 - 9) 束景南『朱熹年譜長編（増訂本）』上巻、華東師範大學出版社、2014年、4～6頁。
 - 10) 「朱熹政和祭祖詩篇：演繹千年守望佳話」<http://travel.fjsen.com/2017-08/21/content_20034235.htm>（2019年3月2日確認）
 - 11) <https://tv.sohu.com/v/dXMvMjk3MTM1Njk1Lzg2MTg0MzAzLnNodG1s.html>（2019年3月2日最終確認）
 - 12) 竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』汲古書院、2000年。
 - 13) 佐々木愛「伝統家族イデオロギーと朱子学」小浜正子他編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会、2018年。
 - 14) 黄榦墓の門に掲げられた「賢陵園管理处」という石版には「第一屆賢陵園籌建會成員」として黄姓の7名の名が上げられているが、その筆頭は黄如論氏、第2位が黄宏飛氏である。黄宏飛氏は香港で建築会社を経営する実業家で、黄宏飛氏は黄榦の殯の場・高峯書院についても近年多額の寄付を行って再建した。「"宋大儒"黄干高峯書院再開講 港商斥資千万修復」<<http://money.163.com/14/0707/18/A0IQJA600254TI5.html>>（2019年3月2日最終確認）